

土にも えんじゅ

やぶらなや

静岡県掛川市・松下農園・松下芳香

今年一月、小笠山の松下農園には3000袋の漁カスが準備されていた。一袋20kg、値段は3000円。県内でもこれだけの量の漁カス肥料を使うことができる農家は限られている。

「茶の樹の根っここのところの土は胃袋と同じで養分を蓄えてもらわなければならぬから、粘土や腐植土にするんですが、肥料が長くじわじわと効くようにするには植物性より動物性のチッソ肥料のほうがいいんです。そのほうがアミノ酸の多いまいお茶ができる。動物性の肥料を入れると地温が一気に上がるんで

地温の低い一〜二月に使うことで根が焼けるのを防ぎます。地温が高くなる八〜九月の秋肥えには菜種カスのような植物性の物を使って温度が

上がらないようにしていくんです」と松下さん。

チッソ肥料を多く使えばお茶は確実にうまくなる。しかし環境問題から使える量が決まっているというジレンマ、またそれだけ高い肥料を使ってもそれを回収できる収入も期待できない時代にもなってきている。

「工場の設備がお茶を良くしてくれるわけじゃあないから、もつと本気で畑に手をかけないと。根本は畑だし、土だし。土の中の状態が解るから百姓なんで、むきになってでもこれは変えない。手軽な化学肥料ばかり使ったら、そりゃ土も痩せるさ。有機をやりたい人は多くなってきたけど、できるできないじゃなくて失敗しながら覚えていくしかない。生きものって『もつと生きたい』って思う

まごころ銘茶 狭山園だより



ような生命力があるものが良くなっているんですよ」とちよつと苦笑いする。



松下農園には蜂が多い。蜂は虫を食べてくれる。以前しや

くとり虫が発生したときも無農薬の畑には来なかった。農薬は天敵をも殺す。

「農薬だったら、これでの虫死にますよって教えてもらって、だれがやってもそうなるけど、有機農業はそうは絶対ならない。現場に行ったら困り果てて対策を練る、その繰り返し。みんな害虫ばっかり探すけどその中に天敵がいなくて気づかない。その場所のもつてる良さを引き出しながら適材適所でやっていくしかない。同じ場所でも

やってることは10年前とはぜんぜん違いますよ」。

冬場に茶畑にいけない農家が増えている。経済的なことから冬に野菜を作り始めている人もいる。冬にしっかり土を作らなければいい茶はできないと松下さんは言い切る。

「努力をしないで『できちゃった』ということは本来ないです。結局、お茶がどれだけ好きかなんですよ。いくら状況が悪くなくても、好きなやつは、それでもしがみついていますよ」と閉めくくった。

日本食ブームを背景に国際的な有機認証を持つ松下農園の茶は海外からの引き合いが多くなっている。茶の生産をしていない国には茶の農薬の安全基準はない。まずは有機という。長い間培ってきた農業がまた違う局面を作り出すとしていく。初孫を抱く松下さんの笑顔が幾分やさしくなったように感じた。

